

# 平成 29 年度 第 4 回 木材需給会議 資料の概要 (案)

## 1. 一般経済の動向 (資料 1)

2017 年度の実質 GDP 成長率は前年比+1.8%と 3 年連続でのプラス成長が見込まれる。

2018 年度も景気の回復は続き、実質 GDP 成長率は前年比+1.2%と 4 年連続でプラス成長を達成すると思われ、オリンピックを控えたインフラ建設などの需要の盛り上がりや、首都圏での再開発案件の増加などが景気の押し上げ要因となる。また、海外経済の回復の継続を受けて輸出の増加が続くほか、設備投資は、企業業績の拡大を背景に人手不足への対応のための投資や研究開発投資の増加が続くと予想され、個人消費も底堅さを維持する見込みである。

景気の下振れリスクとしては、第一に、北朝鮮情勢の緊迫化などの地政学リスク、欧米の政治的な混乱、中国の景気失速などによって国際金融市場が混乱し、世界経済が減速することが挙げられる。また、雇用情勢の改善が続く中でも、実質賃金の減少によって個人消費が低迷する懸念があるほか、最近では人手不足の深刻化によって一部の業種で供給制約に直面しており、景気の拡大を阻害するリスクがある。

## 2. 住宅着工見通し (資料 2)

2017 年の住宅着工は 96.5 万戸、前年 96.7 万戸に対して-0.3%と僅かながら前年割れとなった。なお、住宅着工全体の 56.5%を占める木造住宅は、54.5 万戸、前年比-0.2%であった。

利用関係別には、4 割を占める貸家は 6 月以降、減少したが通年では 41.9 万戸、前年比 0.2%と前年並み、同様に減少が続いた持家は 28.4 万戸、同-2.7%となる中、分譲戸建は、13.8 万戸、同 3.3%と 2 年連続で増加し 2006 年以來の高水準となった。分譲マンションは 11.5 万戸、同 0.2%と前年並みであった。

住宅着工を牽引してきた貸家着工は、相続税対策の一巡等をはじめ、空室率上昇や新規貸出減など調整要因による減少が続き、また、建築費や労務費の上昇等から持家着工も減少が続いていた。

直近 2018 年 1 月の住宅着工は 6.6 万戸で前年同期比-13.2%の大幅減 (季調済年率換算値：瞬間風速 85.6 万戸) となったが、前年に五輪関連の選手村着工があり、これが分譲マンション中心に大幅減となった背景の一つにある。

住宅着工を取り巻く環境は、超低金利による住宅取得能力の押し上げ効果はあるものの、建設資材や労務費などコスト上昇、天候不順や地政学リスクなど不安材料も漂う中で、着工の足取りは徐々に重くなってきている様相もうかがえる。

今後の住宅着工見通しについて、民間シンクタンク等の予測では、2017・2018・2019 年度は、90 万戸台半ばから前半との見方が主流であったが、貸家の減速スピードのほか、消費税率引き上げ前の駆け込み需要の発現時期やその強度などの想定は一樣ではなく、2018・2019 年度に向けて増加を見込む見方もあった (GDP 10-12 月期一次速報公表後)。なお、二次速報公表後に見通しを改訂した機関では、数千から 1 万戸程の下方修正もあった。

今後に向けては、さらに、各種住宅関連支援策の下支え効果、新たな相続・贈与に関する資産関連税制の影響などにも留意して注視していく必要がある。

## 3. 住宅業界の動向 (資料 3)

住団連が実施した住宅会社の「支店、営業所の営業責任者に対する住宅業況調査」の結果は、戸建注文住宅では H29 年 10-12 月の受注実績は、7-9 月に対し-24 ポイント、金額でも-1 ポイントと棟数、金額ともにマイナスに転じた。

また、住団連の「低層住宅に関する経営者の景況感調査」では、対前年比の総受注戸数は、+4 ポイント、金額でも+8 ポイントと、戸数では 6 四半期連続、金額でも 3 四半期連続のマイナスがプラスに転じた。

これに対するコメントとしては、「厳しい状況ではあるが、前年並みの受注である。」、「賃貸住宅の好調な受注が全体を押し上げた結果。」と、H28 年 6 月の消費増税延期発表以降、低下し続けた総受注戸数が、一

且底を打った感がある模様である。

住友林業の2月度の戸建住宅の受注も対前年比+4%とやや改善。通年では、前年比ほぼ同様と推測される。

#### 4. 木材業界の動向 (資料4)

平成29年12月の販売量、仕入量については、流通部門、製造部門ともに増加となった。一方、1月以降については、販売量、仕入量ともに減少傾向に転じてきており、仕入価格については、流通部門、製造部門ともに上昇が続く一方、販売価格は変わらずとの回答が多く、上昇傾向にはあるものの、依然、売価に反映されていない景況感となっている。

3月以降の販売量、仕入量の動きに関して、流通部門、製造部門ともに増加の見通し、販売価格については、流通部門・製造部門ともに持ち合い予測、仕入れ価格については、流通部門・製造部門ともにやや強含みの見通し。

3ヶ月後の相場予測については、米材、南洋材は強含み予想、北洋材(欧州材を含む)は、流通部門ではやや強含み予想、製造部門は強含み予想となっており、国産材は、流通部門、製造部門ともにでは強含み予想となっている。

プレカットの動向については、流通部門、製造部門ともに、落ち着いた動きが継続をしている。

#### 5. 木質バイオマスの動向 (資料5)

FIT認定を受けた木質バイオマス発電所に対する調査において、平成29年10-12月の燃料調達量の回答があった49事業所のうち、調査項目について連続して回答があった43事業所を集計した結果、平成29年10-12月の燃料使用量は、未利用木材が350,622tで平成28年度四半期平均に比べて、24%の増加、一般材は119,849tで同7%の減少となった。

未利用木材及び一般材の木質系の合計は、10-12月期は前期に比べて若干減少しているものの、ベクトルとしては伸びを示しており、今後とも需要伸びるとは見込まれる。

#### 6. 木材輸出の動向 (資料6)

平成29年1月から12月までの輸出数量は、丸太は97万1千 $\text{m}^3$ で前年比49%の増、製材は13万4千 $\text{m}^3$ で50%の増、合板は11万8千 $\text{m}^3$ で21%の増となった。

輸出総額は326億円で、前年比37%の増となった。国別には、中国が61%の増で145億円、第2位のフィリピンは33%の増で74億円、第3位の韓国は19%の増で37億円となっており、上位国への輸出は引き続き好調である。また、第4位には前年比43%増で19億円の米国が入った。

例年、中国等の春節前後の1、2月は取扱量が減少するが、本年1月は落ち込み量が少なく、丸太では前年同月比92%増の輸出量となっている。

#### 7. 紙パルプ産業の需給動向 (資料7)

紙板紙の国内出荷は紙で前年比マイナス、板紙で前年比プラスの傾向が続いている。紙では印刷情報用紙をはじめ主要品種でマイナス、板紙では段ボール原紙が通販向け需要の好調に加えて、食品向けや電化製品向けも堅調に推移していることからプラスを維持している。また、中国では環境問題から古紙の輸入ライセンス発給が滞っているため、日本からの中国向け古紙輸出が低迷している。

パルプ材の集荷は針葉樹、広葉樹共に微減となった。その中で、国産針葉樹では、住宅着工量が7月以降前年比マイナスとなっているものの、製材残材チップの出材量は堅調に推移していることから前年比プラスとなった。一方、輸入針葉樹は国産材に押される形でマイナスとなっている。国産広葉樹では慢性的な労働者不足等から前年比マイナス傾向が続いているが、加えて今年は年末から雪の影響も出ているようである。輸入広葉樹は紙の主要品種の慢性的な需要減少から国産材の減少分を取り込む形での微増に止まっている。

## 8. 国産材に関する動向 (資料8)

2月上旬の森連共販平均価格は、スギ柱用材が前月比 $m^3$ 当り 300 円安の 12,100 円、同中目材は前月比 $m^3$ 当り同値の 12,400 円、ヒノキ柱用材が前月比 $m^3$ 当り同値の 16,100 円、同中目材は前月比 $m^3$ 当り 100 円高の 16,100 円となった。

1月は大雪の影響から出材が滞る地域が多かったものの、スギの原木販売量は前月と比較して増加した。原木需要は、スギ柱用材は弱含み、スギ中目材、ヒノキ柱用材は保合、ヒノキ中目材は堅調に推移した。一部地域では製品需要に一服感が出ており、スギ原木は保合から弱含みに推移。一方土台用として引合いの強いヒノキ中目材は堅調を維持している。

2月も天候不良によって出材に影響が出ている地域が多く、原木不足により買い気が強まる可能性がある。また、前月から一服感があるプレカット需要は春先に向けて回復するとの声もあり、今後の価格動向に期待したい。

## 9. 国産材丸太(製材用)の動向 (資料10 - P1)

平成29年第4四半期の実績は、降雪の影響も心配されたが、外材の供給に不安もある中、全国的には好調な荷動きで、引き合いは強い気配であり、前年同期比で増加した。需要が比較的高いところでしばらく落ち着き、引続き価格も強含みの傾向が続くと予想される。

平成30年第1四半期の見込みは、需要は底堅い状況が続くと思われ、外材の供給状況が変わらなければ、前年同期比で増加の見込み。

第2四半期の見通しは、3カ月前の見通し等についての意見の中では、プレカットの受注残の状況等から、急激な需要の減少は想定しにくいとの期待が多かったこともあり、前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、外材の供給状況がこの時期まで変わらないかどうか鍵となると考えられるが、この時期には林野庁のJAS構造材普及促進事業による無垢材利用についての広報活動等も浸透し、関心も高まってくる可能性もあり、前年同期比で増加の見通し。

## 10. 国産材丸太(合板用)の動向 (資料10 - P1)

平成29年第4四半期の実績は、堅調な住宅着工(特に構造用合板の需要増大)、国産材合板へのシフトの促進、輸入合板の減少傾向、フロア台板等への国産合板の需要増大、型枠用合板の需要増大傾向、南洋材合板等に関する違法伐採等の環境問題、国内合板工場のフル稼働、合板工場の設備投資による生産能力、効率のアップにより前年同期比で増加した。

平成30年第1四半期の見込みは、前期要因により、前年同期比で増加の見込み。

第2四半期の見通しは、前期要因に加え、新設の合板工場の稼働により、前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で増加の見通し。

## 11. 米材丸太 需要動向 (資料10 - P2)

平成29年第4四半期の実績は、前年同期比で減少となった。北米産地では夏場のファイヤークロージャ一後の影響で伐採(出材)が減少した上に、好調な米国住宅着工需要に支えられ、丸太・製品価格が共に高騰、対日輸出価格も大幅な上昇となり、日本では需給、在庫ともに大幅な縮小となった。

平成30年第1四半期の見込みは、前期からの影響もあり、米材の需給は逼迫気味で、内外価格は共に強含みで推移し、先高観から買い気は旺盛となり、前年同期並みの需給、在庫水準に戻ることが予想されるが、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、夏場の住宅着工需要期となり、前年並みの需要規模にまでは回復することが見込まれ、相場的にも値上げは一服で、持ち合いとなることが予想され、前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、例年7-9月期は若干、国内需要は落ち込むため、前年同期並みの見通し。産地でも近年では毎年のように森林火災対策としての伐採規制がある為、今年も注意が必要であり、入荷量次

第では、相場的に弱持ち合いに転ずる可能性もある。

## 12. 米材製材品 需要動向 (資料10 - P2)

平成29年第4四半期の実績は、入荷が少なかったため、販売する原木が不足し、前年同期比で減少となった。この傾向は平成30年の春先まで続くことが予想される。

平成30年第1四半期の見込みは、現地の原木価格は高値が続いているが、製材工場としては高くても材を確保しなくてはならないので、先高を見込んでの需要が出るものと予想され、前年同期比で増加の見込み。

第2四半期の見通しは、北米の伐採も正常に戻り、出材も増えることが予想され、アメリカの最大手の原木業者も、値上げは見送りで同値でのオファーとなったが、アメリカ国内の需要が過熱ともいえるほど順調なので、日本向けに入ってくる原木は増えないと思われるため、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、現地の在庫も回復し、買いにくさはなくなると思われるが、今年後半の不安は、住宅着工数の頭打ちにあり、大きく減ることはないと思われるが、消費税率の増税が正式に決まったとしても、まだ仮需が出るには早いため、前年同期比で減少の見通し。戸建て、マンションともに住宅価格はこれ以上あげられる状況ではないため、建築需要も厳しくなっていくものと心配される。

## 13. 北洋材丸太 需要動向 (資料10 - P4)

平成29年第4四半期の実績は、ロシアの日本向け輸出意欲の低下から、入荷の落ち込みが大きくなり、それに伴い需要の減少も大きく、前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、ロシア材の供給に対する信用低下から、引き続き低レベルでの需要が予想されるため、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期及び第3四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で減少の見通し。

## 14. ニュージーランド・チリ材 需要動向 (資料10 - P5)

### (1) ニュージーランド・チリ材丸太 需要について

平成29年第4四半期の実績は、輸出が前年比10%強で伸びており梱包需要を牽引、内地挽き工場の原木需要を押し上げ、前年同期程度となった。

平成30年第1四半期の見込みは、繁忙期のため、10万m<sup>3</sup>程度の需要は継続できるが、1月以降NZ松原木を使った内地挽き製品価格が3,000円/m<sup>3</sup>の値上げとなったため、需要の一部は安価なNZチリ輸入製品や国産スギ製品に流れると予測され、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、決算後の低需要期に入るため前期より1割減が予想され、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、夏場の低需要期であるが、前期と同程度の見通し。

### (2) ニュージーランド・チリ材製材品 需要について

平成29年第4四半期の実績は、輸出が前年比10%強で伸びており梱包需要を牽引、遅れていたチリ材が短期間に複数船入荷となったが、好調な輸出に支えられ需要が大きく伸び、前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込みは、3月末の企業決算を控えた最終需要家からの梱包需要が伸びる繁忙期であり、需要は堅調に推移すると予測されるが、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、決算後の低需要期ではあるが、内地挽き製品の3,000円値上げにより、価格面で優位性のある輸入製品が需要を取り込むと予測されるため、前回予測より増加の見通し。

第3四半期の見通しは、夏場の低需要期だが入荷が順調であれば昨年以上の需要は予想されるため、前年同期比で増加の見通し。

## 15. 米材、欧州材、北洋材、輸入集成材の供給動向

### (1) 米材丸太供給について (資料10 - P2)

平成29年第4四半期の実績は、伐採数量が頭打ちの状態であり、また、カナダ国内工場の需要が旺盛になったため、輸出材が確保出来ず、前年同期比で大幅の減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、前期同様、輸出材が確保出来ず、カナダの数量の大幅な減少が見込まれるため、前年同期比で減少の見通し。一方、アメリカは原木価格が上昇したことで、アメリカの森林オーナーの伐採意欲が掻き立てられており、若干数量が増加すると思われる。

第2四半期の見通しは、カナダ国内工場の在庫数量も正常に戻り、カナダの数量も回復すると思われ、アメリカの数量も若干増加すると予想され、前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、通年通りファイヤークロージャーの影響で数量は減少するため、前年同期比で減少の見通し。

### (2) 米材製材品供給について (資料10 - P2)

平成29年第4四半期の実績は、アメリカ市況の高騰の煽りを受け、前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、1月の入荷量が前年同月比-9.2%となり、前年同期比で減少となる見込み。

第2四半期の見通しは、需要シーズンであるため、前期よりは増加すると思われるが、引き続きの北米市況の値上がりで思うような数量は購入出来ず、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、前期と同程度と予測。北米市況次第ではあるが、高値・需要タイトで思う様に購入出来ない状況が継続されると思われる。

### (3) 欧州材製材品供給について (資料10 - P2)

平成29年第4四半期の実績は、羽柄材等完成品は減少したが、ラミナ中心の入荷となり、前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込みは、1月の入荷量が前年同月比-9.8%となり、北欧・バルトは暖冬の影響で減少しており、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、暖冬の影響及び好調な他国市場へ目が向いており、また、円安・国内価格の頭打ち感があり、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で減少の見通し。

### (4) 北洋材丸太供給について (資料10 - P4)

平成29年第4四半期の実績は、10月早々にアムール川凍結の影響もあり、またカラマツの出材が十分ではなく、前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、原木輸出の税制変更の影響で入荷がより減少すると思われ、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で減少の見通し。

### (5) 北洋材製材品供給について (資料10 - P4)

平成29年第4四半期の実績は、中国を中心に他国市場も良く、対日向けは入荷が減少となり、前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、1月の入荷は前年同月比+18.4%と順調な入荷となり、前年同期比で増加の見込み。

第2四半期の見通しは、寒波の影響、他国市場も良好なことから入荷は伸びないと予測され、前年同期並みの見通し。

第3四半期の見通しは、内地価格も天井感、他国市場は勢いがあり、対日向けの魅力は減少し、前年同期比で減少の見通し。

#### **(6) 輸入構造用集成材供給について (資料10 - P7)**

平成29年第4四半期の実績は、好調なレッドウッド中断面需要を背景に前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込みは、主のレッドウッド中断面の入荷のズレが生じた結果、1月の入荷は前年同月比-7.7%となり、市況が悪く、管柱は大幅に減少し、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、ホワイトウッド管柱の低迷は継続し、レッドウッド中断面も価格が高く需要も一服し、旺盛な買付は無かったことから、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で減少の見通し。

### **16. NZ・チリ材の供給動向 (資料10 - P5)**

#### **(1) ニュージーランド・チリ材丸太 供給について**

平成29年第4四半期の実績は、ほぼ需要に見合う数量の入荷となったが、前年同期比で減少となった。四半期ではなく下期と比較すると、前年同期比でほぼ同水準の入荷であった。

平成30年第1四半期の見込みは、消費量に見合った入荷となり、前年同期比で増加の見込み。

第2四半期の見通しは、平成30年の消費量を40万 $m^3$ と想定し、例年の入荷傾向を加味し、算出したが、前年同期の入荷はやや高水準であったため、前年同期比で減少となる。

第3四半期の見通しは、前期同様、年間消費量40万 $m^3$ と想定し、例年の季節要因による入荷傾向を加味したが、前年同期の入荷はやや高水準であったため、前年同期比で減少の見通し。

#### **(2) ニュージーランド・チリ材製材品 供給について**

平成29年第4四半期の実績は、前年同期比で減少となったが、平成29年入荷数量の合計は前年比で増加となった。NZ製材は減少したが、チリが大きく数量を伸ばした。チリ製品供給は安定しており、NZ原木、製品両方のシェアを喰っている。

平成30年第1四半期の見込みは、平成30年予想はチリ290千 $m^3$ 、NZ65千 $m^3$ 、合計355千 $m^3$ 、四半期平均は89千 $m^3$ と予想し、前年同期並みの見込み。

第2四半期の見通しは、前期並みの入荷量と予想し、前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、チリは夏場の出材減で減少が予想されるが、NZは秋口のケーブルドラム向け需要増で入荷が増加することが予想され、前年同期比で増加の見通し。

### **17. 南洋材丸太(製材用)、南洋材製材品の需要動向 (資料10 - P3)**

#### **(1) 南洋材丸太(製材用) 需要について**

平成29年第4四半期の実績は、供給に見合った出荷となり、前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、1月出荷は3,277 $m^3$ (前年同月比95.5%)となり、原木出材不足が続き、丸太入荷は限られると思われ、前年同期並みの見込み。

第2四半期の見通しは、入荷減、価格上昇が続き、在庫が少ないが、供給に合わせた需要になると予想され、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、供給に見合った需要が予想され、前年同期並みの見通し。

#### **(2) 南洋材製材品需要について**

平成29年第4四半期の実績は、住宅着工は減少傾向ではあるが、非住宅の動きが良くなってきており、前年同期並みとなった。

平成30年第1四半期の見込みは、1月出荷は38,277 $m^3$ (前年同月比83.6%)であったが、年度未完工物件も多く、前年同期並みの見込み。

第2四半期の見通しは、住宅以外に店舗やリフォーム物件で、カウンターや棚板等で底堅い需要があると思われ、前年同期並みの見通し。

第3四半期の見通しは、オリンピック関連、非住宅の動きはあると思われ、住宅着工に大きな落ち込みが無ければ、前年同期並みの見通し。

## 18. 南洋材丸太（合板用）の需要について（資料10 - P3）

平成29年第4四半期の実績は、針葉樹合板へのシフトの進行、産地価格の高止まり、産地のインドが中国市場等へのシフト、産地の違法伐採対策等環境問題の影響、設備投資による国産材針葉樹合板の生産能力のアップ、南洋材取扱工場の減少により前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、前期要因の加速化に加え、生産現地の天候不況による出材の減少により前年同期比で減少の見込み。

第2四半期及び第3四半期の見通しは、前期要因はあるが、前年同期並みの見通し。

## 19. 国産、輸入合板の需要動向（資料10 - P6）

### (1) 国内製造合板需要について

平成29年第4四半期の実績は、住宅着工数は7月より連続で前年比減の推移だが、九州等で在来工法の面材体力壁用途の構造用合板が増加の傾向となり、また、フローリング用針葉樹合板等の非構造用途の需要も堅調に増加で推移して来たことから、前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込みは、住宅着工数は第1四半期も前年比減の傾向が予想され、需要減少要因だが、針葉樹構造用合板の面材耐力壁や非住宅用途、非構造用ではフロー一台板、型枠合板の用途向け拡大が一層進むと予想され、前年同期比で増加の見込み。東日本では東北・北海道など降雪の影響は大きく中小工務店の引き合いは落ち着いている。一方、西日本の九州地区では構造用合板の引き合いは相変わらず強い状態が続いている。

第2四半期の見通しは、住宅着工数は賃貸の減少傾向など影響を受けられるが、大手プレカット工場などは4月からの平常の加工を計画しており、また、4月から予定される新規生産拠点の稼働により、フロー一台板などの非構造用の広がる用途の需要を支え、前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、住宅着工数は前年比水準に回復するとみられ、また建築基準法の一部改訂により非住宅分野での建築物の木造化も追い風となり、用途の拡大が一層期待され、オリンピック需要についても遅れている合板型枠などの使用は、第2-3四半期に顕在化してくると予想され、前年同期比で増加の見通し。

### (2) 輸入合板需要について

平成29年第4四半期の実績は、サラワクの伐採税率引上げ、丸太出材不足のなか駆け込み発注分の集中入荷となり、これに応じて待ち望んだ需要家への出荷となったことから、前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込みは、当初、前期の集中入荷の反動が今期に現れると予想していたが、フロー一台板であるファルカタ合板のコンテナでの入荷が多く見られ、前回予想より増加したが、前年同期比で減少見込み。塗装型枠合板や薄物・中厚合板などの品薄感の強いものは、出荷が入荷水準に対応し、品薄感の弱い生型枠合板等は、一部在庫となる見込み。

第2四半期の見通しは、丸太の出材不足に加え、期間中ラマダン（断食月）など生産が落ちる要素により、供給（入荷）は減少する見込みであるが、不足感のあるアイテムは変わらず強い引き合いが続く見通しであり、前年同期並みの見通し。

第3四半期の見通しは、丸太不足のなかでの生産に加え、日本以外の他地域への供給の価格メリットのため、日本向け供給（入荷）の増加には厳しい環境が続くものと思われる。一方、輸入合板の需要は品薄アイテムを中心に衰えは見られず、入荷量の水準は出荷されてゆく見通しであり、前年同期比で増加の見通し。

## 20. 南洋材、輸入合板の供給動向

### (1) 南洋材丸太 供給について (資料10 - P3)

平成29年第4四半期の実績は、10月9千 $m^3$ 、11月15千 $m^3$ 、12月13千 $m^3$ の入荷となり、産地天候不順による集材不足により前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、1月17千 $m^3$ 、2月15.5千 $m^3$ 、3月14.5千 $m^3$ の入荷となる見込みであり、前年同期比で大幅な増加の見込み。これは、例年新潟港開港閉鎖があり入荷は低調になるが、本年は実施されなかったため、影響を受けずに新潟港へ約25千 $m^3$ の入荷となった。

第2四半期の見通しは、平成29年の年間消費を170千 $m^3$ と想定し、平成30年第1四半期47千 $m^3$ を除いた残り123千 $m^3$ を3四半期で平準化させ、前年同期並みの見通し。

第3四半期の見通しは、前期の考え方により算出したが、前年同期の入荷が多かったこともあり、前年同期比で減少の見通し。

### (2) 南洋材製材品 供給について (資料10 - P3)

平成29年第4四半期の実績は、サラワク州でのティンバープレミアムによる出材減やサバ天候不順による出材減により前年同期比で減少となった。

平成30年第1四半期の見込みは、平成30年入荷予想を460千 $m^3$ と予想し、雨季、春節により平均値を下回る予定であるが、前年同期比で微増の見込み。

第2四半期の見通しは、雨季も終わり通常ペースに復帰すると思われるが、前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、前期要因により、前年同期比で増加の見通し。昨年はティンバープレミアム導入により第3四半期が特に落ち込んだが、今年は平均化されると思われる。

### (3) 輸入合板 供給について (資料10 - P6)

平成29年第4四半期の実績は、マレーシア合板の入荷増やティンバープレミアム値上げ及び長雨による原木不足を背景に第3四半期に新規契約が集中したことから、前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込みは、雨季による原木不足、旧正月、テトの影響にて全体的に入荷量減少傾向であるが、新規契約量は落ちておらず70万 $m^3$ 台は維持されると予想されるが、前年同期比で減少の見込み。

第2四半期の見通しは、原木状況は多少改善するも、5、6月は断食、イスラム正月の影響からマレーシア、インドネシア合板生産量は減少し、また、新規契約量も落ち着くことから前年同期比で減少の見通し。

第3四半期の見通しは、原木状況の改善、秋需背景により入荷量増と予想され、前年同期比で増加の見通し。

## 21. 国内製造合板 供給について (資料10 - P6)

平成29年第4四半期の実績は、堅調な住宅着工、国内合板工場のフル稼働、輸入合板の減少傾向、産地の違法伐採対策等環境問題の影響、フロア合板用国産材合板の需要増大、設備投資による国産材合板の生産能力、効率のアップ等により前年同期比で増加となった。

平成30年第1四半期の見込み及び第2四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で増加の見通し。

第3四半期の見通しは、前期要因により前期並みの見通し。

## 22. 集成材に関する動向及び国内製造構造用集成材の供給動向 (資料9、資料10-P7)

平成29年第4四半期の実績は、12月に入り需要の陰りが見え、生産量は10月、11月と比べ10%以上落ち込んだが、10月、11月の生産量の水準も高く、当初見込んだ生産量となり、前年同期と比べても高



水準となった。

平成30年第1四半期の見込みは、例年1月、2月は需要が盛り上がり、生産日数も少なく、他の期と比べ生産量は落ち込む傾向にあるが、今期も1月、2月は需要が落ち込み、販売に苦戦している企業も見られる。とりわけ2月の大雪の影響で、工場操業の停止などの影響を受けた企業もあり、前期生産量より相当落ち込むものと見込まれる。

第2四半期の見通しは、住宅着工の大きな落ち込みはないものと思われ、前期より需給の状況は改善されるものと想定し、前年同期とほぼ同様な生産量程度に増えるものと見込んだ。

第3四半期の見通しは、秋需や消費税の駆け込み需要もそろそろ見込まれるものと想定し、生産量は前期より増え、前年同期の生産量には届かないものの、40万㎡に近い水準となるものと見込んだ。